

外来でできる 運動器疾患に対する最先端保存療法

introduction

従来の保存療法は、鎮痛薬主体の薬物療法、ブラインドのブロック注射、マッサージや漠然とした温熱療法中心のリハビリテーションが主体で、とすると手術療法に比べて“切れ味”が鈍く消極的なイメージがありました。しかし、近年、さまざまな物理療法、再生治療、新しい手法などが開発され、治療に必要とされる効果の確実性・安全性・持続性が高まっています。また、再生治療による組織再生により再発予防効果も見込めるようになっていきます。さらに、単一療法だけでなく複数の治療法を組み合わせる combination therapy を用いて、より早くより確実に治す積極的保存療法が試みられ、まさに切らずに治す保存療法が攻めの時代に入っています。

本号では、「外来でできる運動器疾患に対する最先端保存療法」に取り組まれている総勢 18 名の先生方に、各テーマについてより具体的な解説をお願いしました。体外衝撃波治療 (extracorporeal shock wave therapy ; ESWT) は、腱症・付着部症については普及していますが、今回は半月板損傷・離断性骨軟骨炎・痙縮・筋タイトネス・創傷に対する効果を報告していただきました。再生治療の領域では、多血小板血症療法 (platelet-rich plasma ; PRP) の靱帯損傷・肉ばなれに対する効果、自己蛋白質溶液 (autologous protein solution ; APS) ・滑膜性間葉系細胞・脂肪由来間葉系細胞の関節内注射療法をテーマとして取り上げました。新しい手法としては、難治性腱・腱付着部症に対する超音波吸引治療、腰椎椎間板ヘルニアに対するコンドリアーゼ注入療法、運動器カテーテル治療にフォーカスを当ててみました。その他に、ESWT 以外の物理療法として注目されているパルス高周波療法・神経筋電気刺激療法、今や整形外科診療において欠かせないアイテムとなった超音波を最大限活用した最先端の超音波ガイド下 intervention、相乗・相加効果を狙った combination therapy についても、その臨床効果を紹介していただきました。

本号は、運動器疾患に対するさまざまな積極的保存療法を網羅した非常に魅力ある内容となっていますので、是非ご一読いただき、保存療法の治療戦略を練り直してみてください。

春日井整形あさひ病院スポーツ医学・関節センター
岩堀裕介